

きびしい残暑が、朝夕のすみきった爽やかさにとつて変わった。そしていま、秋のあわれを秋風によつて、身に入む季節を迎えた。「秋寂ぶ」も、もうすぐそこに来ている。

八月に友人に分けてもらった鈴虫が、かめの中で日に日に成長してきた。「ものあはれ」とまではいかないまでも、風流の入口に坐する心境でいたものだ。

虫といえば、和歌の伝統の中では、秋鳴く虫の総称だが、その鳴き音から虫の名を思いつくのは難しいものだ。専門的識見のある場合は別だが、大体はキリギリス、コオロギ、ときて鈴虫くらいをあげられれば上の部である。

こころみに、手元の辞書を開いてみる。

コオロギ科に属するものは、蟋蟀こむぎ、鈴虫ねむし、鄂かぶ、草雲雀くさぐさ、鉦叩かねたたなど、キリギリス科では、蝻せみ、馬追うまお、響虫などがあげられている。ところが、キリギリスがコオロギの古称で、コオロギ科の松虫が鈴虫の古称であるに至っては、なにがなんだかわからない。もつとも万葉では、秋の鳴く虫の総称としてこほろぎといっていたものを、平安以後、それぞれの鳴き声を聞き分けて名前をつけたことをおもえば、松虫が鈴虫で、キリギリスがコオロギであつても一向にかまいはしない。

平安時代にキリギリスといったのは、つづれ

させこおろぎのことで、「リーリー」と鳴くが、これを風流人は、衣の綴れを刺せと、秋の用意を促すようにその音色を聞いたのである。コオロギは、「コロコロコロコロロギ」と鳴くのだと、真顔で言つた友達を思い出す。えんまこおろぎが「コロコロコロロリン」と高声に、昼夜を問わず鳴くことをみればうなずけないこともないが、一般にリ音の連続が多いようだ。「リーン」といえば、鈴虫は「リーンリーン」。延喜にさかのぼると「チンチロリン」。

ちんちろりんと鈴を振る音色から考えると、案外この方がより現実的で、松風が身に泌みわたるような音と色をもつ「リーンリーン」は、松虫にあてた方がよいのかも知れない。

キリギリスは、土用から初秋にかけて主に昼間、「チョンギース」と鳴く。「ギーツ」と鳴いて一息ついて「チョン」と続くともう。なにやら、「鶴の恩がえし」の世界を想像させはしないか。別名機織虫。機織女が、まねきを足で踏む音とおさを打つ音に似ているからである。

カントンは、八月はじめころからル、ル、ルと単調な、それでいて微妙な音を出す。木の葉かげからしかも月夜に聞クル、ル、ルは頼りなげはかない。「邯鄲の夢」の故事を踏まえているというが、たしかにそんな人生のはかなさもあろうか。

虫で愛敬のあるのは、カネタタキである。チンチンチンと鉦を叩くような単音を発するが、

こちらは、響きがない。歌などに「蓑虫なく」というのは、このカネタタキを見間違えたそう。ちよいとつまんで、掌にもてあそびたい誘惑にかられる虫である。

馬追は、「すいつちよ」。スイスイチョと鳴く。馬飼が馬を追う時に舌打ちをする音から名付けられたという。風流人の風流韻事にはできすぎているではないか。

がちやがちやと、とりとめのないことを書いた。がちや・がちやは響虫。この鳴き声を秋の夜のくさむらで聞いた時は、ドラ声の気風のよい若者に出会つたような気になつたりすると評したのは誰れであつたか。これら虫は、二枚の前翹を激しくすりあわせて美しい音色を出す。鳴くのは雄ばかりである。おそらく雌を呼ぶのであろうが、その技術をもたない編集子は、これらの鳴き声をシグマして、「ちよんぎ、ちんちろりんですいちよるよ」とかなんとか演歌でもつくるしか手がないのである。

わが家の鈴虫が鳴きはじめた。その音色がりーんりーんかちんちろりんであるか定かではない。が、その余韻が心にある種のやすらぎをもたらしてくれることは、たしかな事実である。

馬追蝻の髭のそよりに来る秋は
まなこを閉ちて想ひ見るべし

節